【ドイツのメディアから – 15 】

**ベラルーシ騒乱とロシアの思惑**

ここしばらく、新型コロナの感染状況と並んでドイツのトップニュースとなり、テレビのニュースでも毎晩報道されているのが、8月9日のベラルーシ大統領選挙が引き起こした同国国民による反ルカシェンコ抗議運動である。今回も“約80％の票を集めた”として当選したアレクサンドル・ルカシェンコ現職大統領は、1991年のソ連崩壊以来過去5回行われた同国の大統領選で常に勝利してきたが、これまでもその不正選挙　－　有力対立候補の逮捕、票集計時の不正、自分に都合の良い選挙法の制定、本来なら誰も過半数に達しなかった時に行われるべき二者対決選挙の廃止、など　－　は内外から批判されてきた。だがそれでもルカシェンコ大統領がこの事実上の独裁体制を維持できてきたのは、経済的に破綻しそうなベラルーシを、EUとロシアを両天秤にかけてうまく立ち回ることでなんとかここまでもたせてきた、あるいはこのところは天然ガスをめぐりロシアに接近し、一部プーチン大統領の言いなりになりながらその経済支援を得てきたためである。ベラルーシはポーランド、リトアニア、ラトビアと国境を接しているが、2004年5月にポーランドとバルト三国が揃ってEUに加盟しEUの範囲が東方に拡大して以来、文字通りEUとロシアの狭間に落ち込んで孤立するような形となった。ベラルーシの南はやはり政情不安なウクライナであるが、ウクライナの方は長年EU加盟を目標としていることもあり、2009年にはEUの“東方パートナー国”に指定されている。これに基づいてウクライナとEUの間には2014年以降、自由貿易を含む経済・政治上の協力関係を内容にした連合協定が次々結ばれ、その後ロシアが介入する内紛に発展したものの、EU加盟への前段階にはすでに到達していると考えられている。だが一方でベラルーシはと言えば、貿易相手国としてEUを無視するわけにはいかず、だが天然ガスではロシアに依存せざるを得ない状況の中にありながら、EUにもロシアにも反感を露わにするルカシェンコ大統領の発言が目立ち、EUとロシアの間をのらりくらりしている印象が強い。そしてEUから見ればベラルーシは、その民主主義にほど遠い国家体制や人権無視の政治から、極めて問題の多い国ということになる。

こうして8月9日、ベラルーシではいつものように“出来レース”の大統領選が行われ、いつものようにルカシェンコが“圧倒的勝利”を収めたわけだが、今回はその後の国民の反応がこれまでになく激しいものとなった。その背景にはまず、ルカシェンコ大統領による新型コロナ対策がある。というより、新型コロナ対策は何もなかったのだ。ルカシェンコ大統領は「新型コロナは人畜無害」との姿勢を取り続け何も手段を講じず、その結果同国では7月末時点で感染者が68000人以上と見積もられた。この新型コロナへの無策は、国民の中に大きな反対と抗議運動を呼び起こし、この流れに乗って幾人もの対立候補者が大統領選に名乗りを上げることになる。ところがこれもまたいつものように、ルカシェンコ大統領は、その中でも数人の有力候補者を何かしらの理由をつけて逮捕、その出馬を妨害したのである。それでも計四人が対抗馬として残り、その中でも、逮捕された一人の候補者の配偶者、スヴェトラーナ・チハノフスカヤ氏が夫の代わりに出馬することになり、最有力候補とみなされた。彼女自身も投票日まで数々の脅迫を受け、一時的に逮捕されもしたが、このような妨害にもめげずに選挙の日を迎えることになる。（ちなみに今回の投票前に選挙関連で逮捕された人数は1300人以上に上ったとのことで、何をか言わんや、である。）投票日には、ジャーナリストの締め出し、投票にやってくる市民の妨害、投票監視人の逮捕などまさに「不正選挙ここにあり」の見本のような場面が繰り広げられたようだが、最後には政府が一方的に、「投票率は84％、うち約80％を現職ルカシェンコ氏が獲得し、対立候補のチハノスフカヤ氏は約10％に終わった」との発表を行い、投票結果とした。ベラルーシ国民の大抗議運動が始まったのはこの夜からである。特に首都ミンスクには10万人以上が集まり、この夜すでに死者が一人出る騒ぎとなった。この夜の抗議運動は全国30都市で展開し、逮捕者は約3000人に上ったと報道されている。逮捕された者たちの一部はその翌日には釈放されたが、釈放の理由は、刑務所が満杯になり入れる場所がなくなってしまったからというものであったようで、その暴挙の物凄さが分かる。チハノスフカヤ氏はこの同じ夜のうちに、発表された投票結果を認めない旨を宣言したが、翌日にはルカシェンコ大統領が勝利宣言を行い、チハノスフカヤ氏は逮捕され一時拘留される。どうやらこの時にチハノスフカヤ氏は自分や家族に対する生死に関わる脅迫を受けた様子で、その翌日にはベラルーシを脱出しリトアニアに逃れるはめになった。だがベラルーシ国民の抗議運動はその後もますます勢いを増して、今や国営テレビ局も含む国営機関のゼネストにまで発展している。先日は、訪れた先で演説をしようとしたルカシェンコ氏が民衆のブーイングに遭い退散せざるを得なくなった様子が、ドイツのニュースにも映し出された。

このベラルーシの現状況に対する国外の反応は、というと、選挙の結果を受けていち早く祝辞を送ったのが、ロシアのプーチン大統領、中国の習近平国家主席、シリアのアサド大統領、トルコのエルドアン大統領という、いかにもの顔ぶれである。対するにEUはこの経緯を憂慮し、ただちにルカシェンコ政権のやり方を暴挙と断じる声明を発表して、逮捕者の即時釈放を要求している。また、8月14日にはEU臨時外相会議が開かれ、ベラルーシの不正選挙とその後のデモ参加者への暴力行為に対して、なんらかの制裁を行うことも提案された。その後8月19日にはベラルーシを議題にしてEU加盟国首脳が集まる臨時EUサミットが開かれたが、この場でEUは、今回のベラルーシ大統領選挙結果は承認しないことを公式に決定、ルカシェンコ大統領に逮捕者の釈放とともに、反対勢力が要求している通り反対派との対話を行うよう要求を突き付けた。だがそれと同時に、このサミットの結果を発表した議長のメルケル首相は、今回のベラルーシ騒乱にEUは決して介入しない旨を明らかにしている。これはロシアの軍事介入をけん制するためだと思われる。事実ルカシェンコ大統領は、すでにロシアのプーチン大統領に救いを求めており、ベラルーシとロシアの間には非常時の防衛協定が結ばれているだけに、最悪の場合ロシアが軍隊を出動させて同国に武力介入してくるのではないかという点が最も危惧される点なのだ。そうなると蘇るのはつい最近のウクライナ内戦の記憶である。2014年にウクライナ内戦が始まった時と同じことが起きるのでは、との心配であるが、実は今回、ベラルーシとウクライナでは状況が大きく異なることも指摘されている。ウクライナの時は、国がはっきり親ロシア派と親EU派に二分されていた。だがベラルーシで現在デモを展開している国民は、ロシアにもEUにも助けを求めていない。彼らが掲げているのはベラルーシの国旗だけであり、そこにはロシアやEUへの呼びかけはない。事実ドイツのジャーナリストがデモに参加しているベラルーシ国民にマイクを向けると、「EUに助けてほしい」という声はほとんど出てこず、「これはわれわれベラルーシの問題なのだから、第三国には介入して欲しくない」ときっぱり発言する人の方がずっと多かったという。だからこそプーチン大統領も軍事介入は避けるであろう、というのが目下の見方だ。「これまでのところベラルーシのルカシェンコ反対派は、地政学上は中立を保っており、ロシアにとっての脅威にはなっていない」とMoscow Timesにも書かれたが、ベラルーシのデモの中にEUの旗は見えていないのに、今ロシアが介入すれば、かえってベラルーシ国民の反ロシア感情を無用に煽ることになってしまう。プーチン大統領が最も避けたいのは、反ロシアの反動からベラルーシがEUに接近することなのだ。だがその一方でプーチン大統領がこのままルカシェンコ大統領を見捨てるというのも考えにくい、とドイツのメディアは報じている。理由は二つあり、もし反対派の運動が勢いを増しベラルーシが民主化に向かえば、その動きが目下はロシア寄りの他の周辺諸国にも広がる惧れがあること。そしてもう一つの理由は、これまでいつも最後はロシアに従順であったルカシェンコの後継者が、果たして彼より従順であるかが期待できないことにある。ロシアとしては、ベラルーシをEUやNATOとの境界に位置する国として、自国のクッション的存在に保っておきたいのだ。

こうして騒乱の真っただ中にあるベラルーシを文字通り間に挟んで、EUとロシアが互いの動きをけん制し合っているのが現在の状況だ。8月18日にプーチン大統領がメルケル首相に電話をかけ、「ベラルーシの国内情勢に外から他国が介入する動きが起これば、状況は一気にエスカレートしてしまう」と警告し、ロシア側からもけん制をしてきたことが伝えられているが、その一方でロシアのセルゲイ・ラヴロフ外相は、「EUの関心はベラルーシの民主化だの人権だのといったことにあるのではなく、同国を無理やり西側の秩序に組み込むことにあるのだ」と、不信感を露わにした発言をしている。EUとロシアは互いに全く信用していない。誇り高きベラルーシの国民が、ルカシェンコ大統領を追放し自国に民主化を実現しようと立ち上がっている時に、EUとロシアの視線はベラルーシを通り越して、その背後にいるお互いの動きに当てられているのである。

（2020年8月 21日）